

『聖公会神学、アジアからの再検討』 日韓聖公会神学会論文集①

A五判、二一五頁、二八三五円

二〇〇六年一月、聖公会

森本あんり



書評の依頼を受けた時、はじめはお断りしようと思った。単著ではなく論文集だし、それも聖公会という教会の内部で交わされた議論の集成だからである。その伝統の外に立つ者がどれだけ書評の任に堪え得るか、自分でもはなはだ心許ない。しかし一読して、これはぜひともわたしのようにならざるに外部の読者にお薦めしたい、と思うようになった(考えてみると、そもそもビュリータン研究者にアングリカニズムの評を依頼するとは、なかなか大胆不敵、あっぱれな編集者ではないか!)

**

本書は、一九九九年と二〇〇〇年の「日韓聖公会神学協議会」に発表された報告の抜粋と編集である。日本から五人、韓国が

この主題は、程度の差はあれ儒教的な背景を共有する日本と韓国で、いっそう喫緊の問題となる。というのも、権威の教会論的な定位が不明確なままだと、東北アジアでは「無批判な権威主義」か「過激な反権威主義」かという不毛な二者択一が結果してしまうからである。これは、アジアの聖公会神学者が論ずるにはまことにふさわしいテーマである。

まず竹内謙太郎氏は、本書の標題ともなった基調講演で、従来の教会や聖書の権威ばかりでなく、会議制や主教職の権威に深刻な疑問符が突きつけられている現状を指摘する。次いで金鎮萬氏は、聖公会の「アイデンティティ」(正体性)が韓国語で同音の「停滞性」に陥らないように、と注意を喚起しつつ、脱権威的状况におかれた大韓聖公会の歴史と課題をていねいに説明している。

加藤博道氏は、サクラメントが教会や聖職の権威と不可分であることを論じつつ、日本の宗教文化の中では「洗礼を受けなければ救われない」と言いにくい現実があることを認める。しかし、サクラメントは本来、現存していない恵みを創り出すものではなく、すでに現存している恵みを意識化し共有するためのものだ、という理解に立

てば、別の視界が開けてくる。

梁権錫氏は、聖書と理性と伝統という三重の構造で権威を理解したりチャード・フッカーの古典に学びつつも、いまだに英国教会の慣行と伝統が無条件の権威とされてしまう日韓の聖公会において、これを再解釈する努力を示している。同氏は、アジア人が諸宗教の多様な經典の読み方を共有することに、伝統の権威が具現化する、とも論じておられるが、ここはいま少し詳しくうかがいたいところである。

聖公会神学の将来を担う立場にある西原廉太氏によれば、「主教性」は首位性と会議性の相互補充において「見事に示されている」とのことである。しかしその聖公会は、カトリック教会とのエキユメニカルな対話の末に、ローマの首位性をカトリック教会自身とともに再受容する決断をしたという。この論理も、外からはなかなか理解しがたい。また、九八年の「ランベス会議」に提出された基礎文書では、「声なき者の代弁」という主張が掲げられているが、昨今のポストコロニアル批判の前では、こ

の主張は慎重な再考を要するかもしれない。聖公会における権威は、主教や司祭だけが担うものではない。朱洛炫氏と伊藤高章氏は、聖書の起源をもつ執事職がヒエラル

キー的な職制理解によって衰退していった歴史を辿り、脱権威主義社会における奉仕の司牧職として、また開かれた教会の象徴として、執事職が回復されるべきであると訴えている。

以上は本書のごく一部を紹介したにすぎないが、アジア発の聖公会神学がもつ問いかけの豊かさは、これだけでも十分におわかりいただけるであろう。

中央集権的な統治形態の誘惑に抗し続け、「分散された権威」における柔らかな一致を旨とするアングリカニズムであるが、世界に広がるアングリカン・コミュニティには、女性主教の按手や同性愛者の受容などに關して、容易に橋渡しのできない不一致も見受けられる。アジアの聖公会は、たとえばアフリカの聖公会が挙げる保守的な声をどのように受け止めているのであろうか。それぞれ独立の管区である聖公会を聖公会たらしめているものは何なのか。そして、金氏の言う「一致の諸道具」は、今後も有効であり続けられるのか。

本書において、アジア神学の問いは、提唱や定義づけや可能性の模索といった準備段階を越えて、まっすぐに内容へと踏み入っている。竹内司祭の次のような結びの言

葉は、わたし自身の考えと重なっていて深く共感できた。アジア神学は、「いわゆる『福音の土着化』」ではない。土着化は欧米のキリスト教理解をアジアの文脈で理解しようとする試みと考える。そうではなく、欧米が長い伝統と神学的営みの中で、見出し得なかったものを発見しようとする試みである」。本書が拙著『アジア神学講義』—グローバル化するコンテクストの神学』、創文社、二〇〇四年)より前に出版されていたら、わたしは必ずこの部分を引用して自説を補強したことであろう。このような試みがアジアで積み重ねられてゆくことで、神学は本来的に必要な変容と発展を遂げることができるのである。

それにしても、編者の香山洋人氏は、編集責任ばかりでなく掲載論文の翻訳までもこなしておられる。聖公会には、このようにすぐれた働き手がおられ、立教大学ばかりでなくいくつもの関連高等教育機関があり、「聖公会出版」という独自の出版機構があり、何と「献金によって運営される神学会」があり、さらに東京教区主教には「主教資金」という特別のお財布がある、ということである。実にうらやましい限りである。

(もりもと・あんり 国際基督教大学教授)